

—新潟医療福祉大学—FD活動の概歴—

新潟医療福祉大学 医療技術学部
作業療法学科 矢谷 令子

平成13年度に開設された新潟医療福祉大学は、保健・医療・福祉関連学科を備えた新設校である。以下本学のFD活動の経過を述べる。

I. 本大学背景と教育理念

本学は、医療技術学部4学科（理学療法・作業療法・言語聴覚・健康栄養の各科40名定員）及び社会福祉学部1学科（社会福祉学科100名定員）の2学部5学科で編成されている。この春、初めての卒業生を送り出すとともに平成17年度には新設学科（健康スポーツ学科60名定員）を発足することになり、保健・医療・福祉の連携教育の充実化を願っている。当初よりは5学科、今春より6学科になるこれ等の専門職はいずれも現代社会において国民の高い関心事であり「健康」に携わる領域である。

大学は、以下に挙げる三つの理念を掲げている。

1. QOLサポーターを育成する大学
 - ・生活の質、生きる質、健康の質を自ら考える。
2. 社会のニーズに応える大学
 - ・地域社会の保健・医療・福祉の需要に対応し臨床と研究にバランスのとれた人材の育成。
3. 国際交流・国際理解を行う大学
 - ・異文化を理解し他文化との共生を学ぶことで多様な価値観に寛容である人材の育成。

特に上記1のQOLサポーターの育成は、本学学長の発案であり、大学の最大目標として強調されている。同時に又その教授法に努力が伴われている。その教授の一例として、患者・対象者中心の保健・医療・福祉である為には、チームワークが不可欠であることから、学生は入学初年次に「基礎ゼミⅠ・Ⅱ」を通して少人数制の交流中心の授業活動に参加する。他学科の専門職への理解、尊敬、協調の重要性、必要性を理解し、進級学年において臨床経験をし最終学年には「総合ゼミ」を通して、自らの体験から対象者中心のチームワークのあり方を再学習すると言うものである。またこのモットーは授業オープンキャンパス、大学祭等にも、しばしば登場し主張される為、卒業時点には、大学の理念、学生個人の目標として受容され、発信されるようになっている。

II. 本大学におけるFD活動の位置付けと概説

20数種に及ぶ委員会の中に「教育開発委員会」があり、当初よりFD活動はその下部組織として位置付けられてきた。発足2年後半より上記委員会機能を二分し一方を「学生教育開発小委員会」他方を「教員組織開発小委員会」とする試行が開始された。発足4年目には後者である「教員組織開発小委員会」を「FD委員会」と称し分離独立することを試みた。また、大学の兼ねてからの提案である「教育開発センター」の発足も平成17年度にむけて規定の作成を行い準備を行ってきた。

III. FD活動年次経過概要

本大学のFD活動は実は、開学を迎える半年前の大学設立準備財団時代に始められた。以下、経緯を追ってご紹介する。

1. 開校準備期教員予定者研修会
 - 新潟医療福祉大学設置準備室担当—
 - 1) 講演1 平成12年8月25日
テーマ「より良い講義をめざして」
講師：新潟大学教育人間科学部 生田孝至教授
 - 2) 講演2 同上日
テーマ「新潟大学工学部におけるGPA制度・キャップ制とその利用計画」
講師：新潟大学工学部 副工学部長 丸山武男教授
2. 平成13年度（開学初年）
 - 第1回FD研究会 —教育開発委員会担当—
 - 1) 第1回新潟医療福祉大学—教育ワークショップ—
平成13年8月3日
—日本医学教育学会担当委員—
 - 2) 教員研修会フォローアップ—教育ワークショップ—とシラバス作成—
—教育開発委員会担当—
平成13年11月7日、14日、28日

3. 平成14年度（開学2年）
 第2回FD研究会 —教育開発委員会担当—
 1) 第2回新潟医療福祉大学教育ワークショップ
 —平成14年9月5～6日—
 ワークショップ「カリキュラムプランニング」
 2) 第3回FD研究会
 講演 平成14年9月18日
 テーマ「大学教育改革の現状と課題」
 —教育開発委員会—
 講師：国際基督教大学学長 絹川正吉教授

平成14年に入り教育開発委員会におけるFD活動の推進を計るべく、“FD委員会発足準備担当会”を起こした。

平成14年5月8日に始まり6回の会議を経て、9月11日に、報告書として下記の内容を教授会に提出している。

- ・作業企画、日程表
- ・作業内容の要約
- ・参考文献リストおよび資料
- ・参考図書リストとその目次
- ・FDオプション勉強会企画（案）
- ・FD勉強会活動企画（案）

この報告書の採用について、本委員会の直接上部組織においては全面的受容が認められず希望者の勉強会として行う形が容認された。

それを受けて、教育開発委員会の実務を整理検討し表1に見る組織を試みることにした。

ここでFDの研究会は教育開発委員会の下部組織“教員組織開発小委員会（FD）”として、希望者対象の形で活動することになった。

当初の予定では、報告書の提出された平成14年9月以降の後半に半年間研究会の試行期間をおいてあったが、幾度かの変更対応を経て、実際には、平成15年度の企画案→承認を経ての活動となった。

4. 平成15年度（開学3年）教員参加によるFD研究会発足
 平成15年度には「平成15年度重点施行事項」に示さ

れた“FDの確立—本学独自のFD法の開発—”を受け、兼ねてより検討されてきた平成15年度企画の実施に入った。

活動企画：活動方針—「本学教員の自発性に基づく研修及び研究の方式」とし、方法は6通りほど提案されたがうち以下の2方法が選ばれた。

- 1) グループ参加型FD研究会（希望をつのるアンケート調査を採用する）
- 2) 応募参加型FD研修会（ポイント制交通費支給を採用）

上記の活動方法1) の場合は、Aグループ教授法研究班BグループはIT研究班になりAグループはさらに4分野に別れて研究を行った。Bグループは、特にパワーポイント・スキャナー活用技法を習得することを目的とし、単発研究会で修了している。

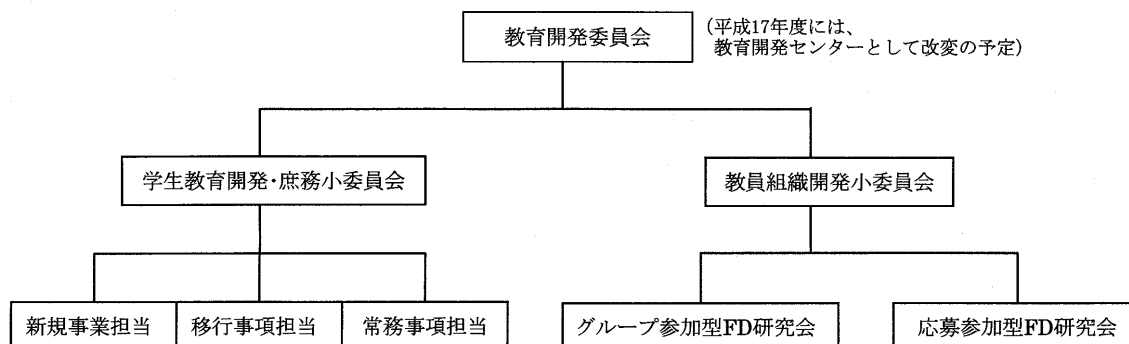
活動方法2) の応募参加型研修会の参加者は、3名で用意された「WS・FD講習会への参加記録」用紙の記入を行い、年度報告書への掲載及び教授会での報告が行なわれた。

尚、平成15年度には、FD活動とは別立てとしたが文部科学省の呼びかけに応えるべく平成16年度募集のCOE（特色のある大学教育支援プログラム）に応募するべく「教育COEワーキンググループ」のメンバーを募った。この作業を行う中で、本大学の理念、目標、特徴、教育組織・実践力、地域との連携実情、教育効果、評価力、学生との連携関係等、様々な実態を再認識することとなった。これ等のことは優に本大学のFD活動の教材テーマとなったことは言うまでもない。応募結果としては平成17年度へ向けて再挑戦となった。

5. 平成16年度（開学4年）「FD委員会発足」

平成16年度は、当初より平成17年度へ向けて提案されていた「教育開発センター」設置への助走もあって、教育開発委員会に位置付けられてきた「FD小委員会」の独立作業が始められた。平成14年度、平成15年度と準備されてきた経過をふまえ、教育開発委員会、上部組織、教授会への報告、承認も得て、6月には分離の形態をとることになった。しかしほぼ同時に提案され

表1



てきた「教育開発センター」の規定作成をまって、それに大きく違えることなく新しい動きを取り入れることになった。勿論、平成15年度に開始したFD委員会の続行も視野にあり教員は希望者主体で現時点に不可欠とする個人の教育ニーズを満たすFD研究活動を行うという目的は明白であった。

一方、大学は平成16年度で完成年次を向かえるため「新カリキュラム」が準備され、新しく付設、増数される学科等を含め教員の移動も少なからず予定されていた。そのため特に新入教員を対象とするこれ迄に行われてきた第1回、第2回のワークショップに事務局オリエンテーションも兼ね備えたFD研究会の企画が要請された。

6月に独立されたFD委員会は活動する間も無く平成17年度当初に開催される「平成17年度全学FD・オリエンテーション研修会」の準備活動に着手することになった。今回は外部依存から一歩成長して学内教員でワークショップを担う予定である。「教育開発センター」規程も出来上がり、「FD委員会」は「教育開発委員会」とこれまでと同様肩を並べて同センターの下部組織として、位置付けられた。今後共、教員組織、教員資質向上、教員能力開発に励む活動は一層明確に推進されていくことになる。

IV. FD活動 雑感

FD活動の歴史やその起源を学ぶ時に私たちは、目の覚めるような反省と共にまばゆいばかりの教育という希望の陽差しに躍動を覚えるものである。しかし現実には厳しくて、FD活動に削ぐ時間等はない、この多忙さを理解せよという教員の声も実態も厳然と不動の如くして、そこにある。だからこそ、FD活動をと願うのであるが、個人の認識も含めあまたの教育環境整備が不可欠である。

活動を行ういとまのある間にすることはあまりにも多いのではないだろうか。

FD活動の課題は、大切な教授力を培う処となるよう具体策を学生諸氏、教員仲間、教職員の諸氏と共に打ち出し実践することが先ずは当面の課題となる。

教育開発センター発足後のFD活動の報告は次回にゆだねることとする。

謝辞：新潟医療福祉大学に暖かく御指導、ご支援をお寄せ戴いて参りました諸先生方、皆様に心からの御礼を申し上げますと共に広く多くの先生方との今後共の御指導を宜しくお願い申し上げます。「ゆっくり、しっかり」の絹川正吉国際基督教大学前学長のお言葉を今後とも咀嚼し励んで参ります。